新制高校生の学校意識について

小滝信夫

I、研究の目的

この研究で取扱おうとする学校意識とは――かりにこのように名づけたのだが――生徒が自分の学校に対して日常いだく態度のことである。このものが生徒の学校での日常の学習態度にはたしてどのような影響を及ぼすものであろうか。

昨年夏、教生の実習指導のため市内の某高校に出向いた折に同校の教官から高校の生徒指導の現状について伺う機会をもつた。そして現在の新制高校の生徒には学力の問題は別として、かつて旧制の中学生に見られたような一本気に学課に取組んで勉強する気風が見られなくなつたということ。そしてこのこと自体の可否には多くの論があるとしても、いずれにせよ生徒が落着いて勉強しようとしないことが教師にとつて生徒の把握に最大の困難を与えていること。そしてまたそれにともなつて生徒達に学校そのものにたいする一種の無関心さが見られ、それが学生相互を孤立的にしそのため学校の雰囲気がざわついている、ということなどを聞かされた。一人の教官はそれを「教室の移動で廊下をどやどやと歩く生徒たちを見ると、そこには群衆かもしくわ個人があるのみで集団としてのおちつきが見られない。」という言葉でいゝあらわされた。たしかに旧制中学には一般的に学業に専心する気風があつた。そしてそれにともなつて校内に一種の完成された雰囲気――校風が存在し、それが生徒たちに強い学校意識をいだかせていた。もしかりに現在の高校に多少でもそれに似たものが存在するならば、それは生徒の指導にとつて一つの有力な手がゝりを与えてくれるものではなかろうか。そのように感じたのがこの研究をはじめる動機となつた。

そこでこの研究の目的は (1)現在の新制高校に生徒の学校意識を強めるような雰囲気があるであろうか。あるとすればどの程度であるか。またそれは何によつて生じてくるであろうか。(2)生徒の学校意識が学校の中での集団的学習態度にはたして影響するものであろうか。するとすればどの程度なのか、この二つの点を明らかにすることであつた。

しかしこのことは現在の新制高校の中に旧制中学のそれのような固定し完成した校風を探し出そうとするのではもちろんない。それはかなり長い期間にわたつて除々に形成されてきた一種の集団意識でありその故に一つの伝統的気風であつた。伝統的とはすなわちそのものの存在の意味づけを過去に求めることであるから、それは保守的なものであつた。そして保守的であることによつて、それはいたずらな改変

をゆるさない一種の不可侵性をおびていた。したがつてそれは教師にとつては生徒を支配するいかめしい精神的手段として重宝がられたが同時にそれは逆に教師を束縛して教師の教育態度をかなり一律的なものにしていたとも考えられる。新しい学制はいうまでもなくわが国の民主化を目標として作られたものであり、そこにおける教育はどこまでも生徒の自発的個性的な学習をうながすものであるべきだとするならば、古い学校に見られたような学校意識をもつことを生徒にのぞむことはそれほどのぞましいことでもなく、また新設日浅い現在の学校に伝統的な雰囲気が形成されることはよい意味にせよ悪い意味にせよまだ遠い将来のことであるとも考えられるのである。

しかし一面学校が生徒ー教師の生きた社会集団であるからには、そこには成員相互を結びつけ、その場的行動を支配する心理的な何らかのものが多かれ少かれ常に存在するのではなかろうか。そしてそれは生徒の日常の学習態度に強い作用を及ぼしているのではなかろうか。そしてそれは何ほどかの程度その学校の雰囲気を決定するものではなかろうか。このような仮説に立つてこの研究がなされた。

Ⅱ、調査の手続と方法

調査の対象。市内某高校生徒男女各学年一〇〇名。計三〇〇名。

調査の期日。一九五三年七月のある日。

方法は質問紙によつた。

質問。

1、あなたはふだん自分が高校生であることに幸福を感じますか。

2、感ずるとすればどんな理由からですか。

3、感じないとすればどんな理由からですか。

4、あなたは自分が〇〇高校の生徒であることを誇りに思いますか。

5、思うとすればどうゆう点からですか。

6、思わないとすればどうゆう点からですか。

7、あなたはふだん学校でおちついて勉強できますか。

8、できないとすればどうゆう理由からですか。

質問は右のように質問紙法という方法上の制約をうけてきわめて簡単なものになつた。そのため幸福感。プライドなどのカテゴリーで生活感情や学校意識の強さを単的に表現するようにつとめた。したがつてこの調査では生徒の個人的な表現のニュアンスを一応無視して行つたものである。

Ⅲ、結果の考察

1、質問。高校生であることの幸福感を感ずるか。

表1の結果をカイ自乗テストによつて考察する

(1)全体の結果から見ると。（下表）

No. 1

反応	学年	Ⅰ f	Ⅰ %	Ⅱ f	Ⅱ %	Ⅲ f	Ⅲ %	計 f	計 %
感ずる＋	男	41	87.4	26	66.8	25	88.5	92	76.6
	女	36	82.0	54	96.6	47	90.4	137	90.1
	計	77	84.7	80	84.3	72	83.7	229	84.5
ー感じない	男	6	22.6	13	33.2	9	21.5	28	23.4
	女	8	28.0	2	3.4	5	9.6	15	9.9
	計	14	25.3	15	25.7	14	16.3	43	15.5
計	男	47	100.0	39	100.0	34	100.0	120	100.0
	女	44	100.0	56	100.0	52	100.0	152	100.0
	計	91	100.0	95	100.0	86	100.0	272	100.0

$x^2 = 12.74$

となつて分布の差は有意味であるとみとめられる。(有意差のテストは以下すべて5パーセントの危険率において決定する)。

(2)性別によつてみれば、$x^2 = 0.09$ となつて男女の分布差の意味はない。

(3)学年別にみると、$x^2 = 1.799$ となつて有意味の差はみとめられない。

(4)性と学年との高次の交互作用は、$x^2 = 5.420$ となつて5パーセントの危険率ではみとめがたい。

したがつて幸福感については一般に大部分の生徒がもつているといえる。この場合男女の別学年の別は無視してもよいといえる。

2、質問。○○高校の生徒としてプライドがもてるか。

(1)2表にしたがつて全体の結果では、この分布差は有意味である。

(2)性別についてみれば、$x^2 = 11.28$ $P < 0.05$ C(連合係数)$= 0.118$ となつて有意の差がみとめられる。しかし関連の度合は非常に低く、ないと見てよい。

(3)学年別にみれば、$x^2 = 3.15$ $n' = 2$ $P > 0.05$ となつて有意の差をみとめがたい。

(4)学年別、性別にみれば、男子 $x^2 = 6.190$ $P > 0.05$ C$=0.238$ 女子 $x^2 = 3.035$ となつて男子については学年による変化がみとめられるが、学年と反応との関連は低い。女子については有意の差がみとめられない。したがつて、全体を見れば約3分の1がプライドがもてないとして学校にたいして否定的である。男女別にみれば男子ではプライドをもつものが2、3年になるといちじるしく減少するが、女子ではこの変化がほとんどみとめられない。男子が女子よりも否定的であるといえよう。

No. 2

反応	学年	I f	I %	II f	II %	III f	III %	計 f	計 %
もてる +	男	32	72.7	19	48.7	16	50.0	6	757.3
	女	35	79.8	42	77.8	40	75.7	11	777.6
	計	67	76.0	61	66.8	56	66.7	18	468.0
− もてない	男	12	27.3	26	51.3	16	50.0	48	42.0
	女	9	27.2	12	22.2	13	24.3	34	22.4
	計	21	24.0	32	33.3	29	34.0	82	32.0
計	男	44	100.0	39	100.0	52	100.0	115	100.0
	女	44	100.0	54	100.0	53	100.0	151	100.0
	計	88	100.0	93	100.0	86	100.0	266	100.0

$n' = 2$　　$x^2 = 39.10$　　$p < 0.01$

3、質問。学校でおちついて学習できるか。

(1)全体を見れば分布の差は有意味であるとみとめられる。

(2)性別にみれば、$x^2 = 3.630$ となつて5パーセントの危険率では有意の差がみとめられない。

No. 3

反応	学年	I f	I %	II f	II %	III f	III %	計 f	計 %
できる +	男	34	77.5	18	47.3	12	40.0	64	57.3
	女	25	61.0	43	80.2	29	60.6	97	68.2
	計	29	69.5	61	67.0	41	52.6	161	63.5
− できない	男	10	22.5	20	52.0	18	60.0	46	42.7
	女	16	39.0	10	18.8	19	39.4	45	31.8
	計	26	30.0	30	33.3	37	47.4	93	36.5
計	男	44	100.0	38	100.0	30	100.0	11	2100.0
	女	41	100.0	53	100.0	48	100.0	14	2100.0
	計	85	100.0	91	100.0	78	100.0	25	4100.0

$n' = 2$　　$x^2 = 9.10$　　$p < 0.01$

(3)学年別にみれば、$x^2 = 5.202$ となつておなじく有意の差がみとめられない。

(4)性別、学年別にみれば、男子 $x^2 = 11.2$ P＞0.05C ＝ 0.30 女子 $x^2 = 4.625$ となつて男子の場合、学年の進むにつれてマイナス反応が多くなる分布の差は有意であるとみとめられるが、その傾向はそれほど強くはない。女子については有意の差をみとめがたい。

したがつて、学校でおちついて学習できないことはかなり多数の生徒に意識されているということが一般にいえる。この傾向は学年の進むにつれて男子にいちじるしくなることがある。しかし性別を考えなければ学年の進むにつれて減少する傾向はみられない。また学年の別を考えないならば男女の差をある程度無視することができるということがいえる。

4、学習とプライドとの関連

(1)4表によつて全体の結果を見れば、

$x^2 = 13.35$ P＞0.01C ＝ 0.22 となつて分布の差は有意とみとめられるが関連の度合は低い。

(2)性別によつてみれば、男子 $x^2 = 12.10$ P＜0.01 C ＝ 0.31, 女子 $x^2 = 3.85$ P＜0.05 C ＝ 0.16 となつて男女いずれの分布も有意差をもつとみとめられるが2項の関連の度合は男子では低く女子ではないにひとしい。

(3)学年別にみれば、x^2 は Ⅰ ＝ 2.05, Ⅱ ＝ 1.18, Ⅲ ＝ 3.08 となつていずれの学年も有意水準に達しない。

(4)性別、学年別にみれば、男子 x^2, Ⅰ＝5.020, P＜0.05 C ＝ 0.31, Ⅱ 0.384, Ⅲ ＝ 0.372, (C ＝ 0.34) 女子 x^2, Ⅰ＝0.052, Ⅱ ＝ 0.929, Ⅲ ＝ 6.59, P＜0.05, C ＝ 0.15 となつて男子では1学年、女子では3学年に有意の差がみとめられるがいずれも関連は低く女子はないのに近い。

以上のテストからいえることは、一般にこの種の学校意識と学習態度とは決して相互に独立ではないが関連の度合は低い。この傾向は各学年に大差はない。男女の差もみとめがたい。

No. 4 プライド

			−			＋			
			男	女	計	男	女	計	計
学習態度	＋	Ⅰ	8	4	12	27	21	48	60
		Ⅱ	9	10	19	9	32	41	60
		Ⅲ	2	3	5	9	26	35	40
		計	19	17	36	45	79	124	160
	−	Ⅰ	6	3	9	4	13	17	26
		Ⅱ	12	1	13	8	9	17	30
		Ⅲ	12	8	20	6	11	17	37
		計	30	12	42	18	33	51	93
		計	49	29	78	63	112	175	253

5、学習態度と幸福感との関連

(1)5表について全体の分布を見れば、$x^2 = 11.08$, P＜0.01, C＝0.209, となつて有意の差を示しているが関連は低い。

(2)性別にみれば、男子 $x^2 = 5.0$, 女子 $x^2 = 1.39$, となつていずれも有意の差はみとめられない。

(3)学年別にみれば、x^2 ……Ⅰ＝0.027, Ⅱ＝3.250, Ⅲ＝5.480, CP＜0.05, ＝0.259, となつて3学年にだけ低い関連がみとめられる。

(4)学年、性別にみれば男子 x^2 I＝7.85, P＜0.05, C＝0.384, II＝0.024, III＝0.297, 女子 I＝0.009, II＝0.137, III＝0.092, となつて1年男子にだけ低い関連がみとめられる。

以上のテストからいえることは、一般に学習態度と幸福感とは相互に無関係ではないが関連は低い。学年、性による差は取上げるほどのものではない。

6、幸福感とプライドの関連

(1)6表について全体をみれば、x^2＝36.8 C＝0.346 となつてあきらかに有意の差がみとめられる。しかし関連は低い。

(2)性別によつてみれば男子 x^2＝29.64, C＝0.46, 女子 x^2＝32.082, C＝0.42となつて男女ともに関連がみとめられる。

(3)学年別によつてみれば、x^2(I)＝6.28 C＝0.258, (II)＝19.3, C＝0.34 (III)＝15.6, C＝0.296, となつて各学年とも有意の差はみとめられるが2学年を除いては関連は低い。

(4)性、学年別にみると、男子 x^2(I)＝17.822, C＝0.53, (II)＝30.018, C＝0.67, (III)＝42.585C＝0.53 女子 x^2(I)＝9.566, C＝0.42, (II)＝0.203, (III)＝18.6, C＝0.51, となつて男子では各学年とも関連がみとめられるが、女子では2学年の場合を標本誤差とするならばやはり関連があるといえる。

以上のテストから、男子も女子も各学年にわたつて幸福感とプライ

No. 5 幸福感

			男	女	計	男	女	計	計
			−			＋			
学習態度	＋	I	2	5	7	33	20	50	57
		II	6	1	7	10	43	53	60
		III	1	1	2	11	27	38	40
		計	9	7	16	54	90	144	160
	−	I	4	3	7	6	13	19	26
		II	7	1	8	13	9	22	30
		III	7	2	9	11	17	28	37
		計	1	86	24	30	39	69	93
		計	27	13	40	84	129	213	253

No. 6 幸福感

			男	女	計	男	女	計	計
			−			＋			
プライド	＋	I	2	5	7	30	30	60	67
		II	1	2	3	17	40	57	60
		III	2	1	3	14	39	53	56
		計	5	8	13	61	109	170	183
	−	I	4	3	7	8	6	14	21
		II	11	0	11	8	12	20	31
		III	7	4	11	9	8	17	28
		計	22	7	29	25	26	51	80
		計	27	15	42	86	135	221	263

No. 7 *a*

理由	男 f	男 %	女 f	女 %	計 f	計 %
A 高度の学習	30	32.5	66	48.0	96	43.1
B 学生生活のエンジョイ	31	33.5	37	27.0	68	30.1
C 未来の希望	24	26.0	23	16.8	47	21.0
D その他	5	5.4	7	5.1	12	5.2
実員	92		137		229	

n' ＝3　　fe＝24　fe＝34.3　fe＝57.3

No. 7 *b*

理由	男 f	男 %	女 f	女 %	計 f	計 %
A′ 独立できない	2	7.1	0	0	2	4.7
B′ 束縛をうける	3	13.5	3	20.0	6	13.9
C′ 将来の不安	8	28.5	5	33.0	13	30.3
D′ その他	17	60.5	9	60.0	26	60.5
実員	28		15		43	

n' ＝3　　fe＝12　fe＝4.3　fe＝10.7

ドとは関連するといえる。しかし男女の別を考えないならば各学年とは関連も低くなる。

7、幸福感をもつ理由

(1)7表aによつて見れば、分布のx^2テストは男子、4.84 P＜0.05, 女子 13.61, 全体 27.51, となつて男子についての結果には信頼できない。女子については充分に有意の差がみとめられる。男女の別を考えなければこの結果を全体として有意の差がみとめられ一般的な傾向に近いものと考えられる。

(2)大半の者が項目Aをえらんでいる。

これにはたとえば。

○家庭の事情で高校へ行けない人のことを思うと自分は幸福だ。（3年女子）

○自分の完成のために必要なものを満たしてゆける。（3年女子）

○もし高校に入つていなかつたら自分の特技が見出せなかつたろう。（3年男子）

などの例にみられるように自分の学生としてのめぐまれた身分。自己完成のよろこびなどをあらわしている。

(3)7表bによれば、分布のx^2テストは、男子 18.77, 女子3.307, 全体31.23, となつて一般的な傾向があらわされているとみなすことができる。

(4)幸福についてのマイナス反応は7表aと対照的な分布をしておらず多くの者が個人的な理由をあげている。

したがつて学生としての幸福感は単に学校環境によつて決定されるものではなく、その背後の広い生活環境からもたらされるものであるということが考えられる。

8、プライドをもつ理由

No. 8 a

理由	男 f	男 %	女 f	女 %	計 f	計 %
A 程度が高い	23	34.4	35	29.8	58	31.3
B 教師が尊敬できる	13	19.4	19	16.2	32	17.3
C 設備、環境がよい	3	4.5	6	5.1	9	4.9
D 学友にめぐまれている	11	16.4	20	17.1	31	16.7
E その他	16	23.9	23	19.6	39	21.1
実員	67		117		184	
$n'=4$	fe=31.4		fe=23.9		fe=36.8	

No. 8 b

理由	男 f	男 %	女 f	女 %	計 f	計 %
A′ 程度が低い	31	64.8	12	35.4	43	52.5
B′ 教師への反感	11	23.0	5	14.7	16	19.5
C′ 設備、環境の不良	8	16.4	7	20.6	15	18.3
D′ 学友にめぐまれない	12	25.0	7	20.6	19	23.2
E′ その他	12	25.0	13	38.3	25	30.5
実員	48		34		82	
$n'=4$	fe=9.0		fe=21.8		fe=16.4	

(1)8表aによつてみれば、分布のx^2テストは男子16.40, 女子19.98, 全体33.84, となつていずれの分布も有意の差があきらかである。

(2)項目Aの頻度が最大である。この中には県下の他校とくらべて誇りを感ずると答えたものが数名みられた。

(3)8表bによれば、分布のx^2テストは男子 4.5, 女子 4.8, 全体

13.9, となつてこの場合女子については有意の差がみとめられずその分布は単なる偶然の結果であつたとみなさなければならない。しかし男女の別を考えないならば全体として有意の分布差をみとめることができる。

(4)項目A′の頻数が多いがこれにはたとえば、

○授業が下らぬ、面白くない。(2年男)

○思想教育をしようとする。ナンセンスだ。(3年男)

○プライドのもてる場所ではない。(3年女)

などの例のようにこの時期の青年の否定的な反撥的な答をなしたものが多い。伝統がなくほこるべき特色がない、と答えたものが一名だけいた。(3年男)

プライドについてはプラス反応もマイナス反応もそれぞれ相対した学校についての理由によることが多い。したがつてプライドは幸福感よりも一層強く学校意識の性質をおびていると考えられる。しかしこれだけの集計からはプライドが学校の伝統的気分と現実的状況とにそれぞれどの程度に関連するかを見分けることはできない。

9、おちついて学習できない理由

これについては調査手続の不備のため答えなかつた者が多かつたため、こゝでは参考の程度に集計するだけに止める。(　)内は頻数。

○モザイク制で教室の移動のためにおちつかない。(13)

○雰囲気がざわついておちつかない。(13)

○授業が面白くない。(9)

○教師・学校に対する反感。(7)

○環境の不備。(5)

○その他家庭的個人的条件。(11)

これらの理由を見ると、生徒の学校での集団学習を妨げるものは学校環境に対するかなり現実的な不満が多いようである。

Ⅲ、結　論

この研究では質問紙によつて現在の新制高校生にみられる学校でのおちつきのない学習態度について、それがはたしてどの程度のものであるか、またどのような条件によるものであるかを知ろうとした。そしてその条件として青年期の一般的な不安動揺性と、特殊的な学校意識とを仮定し、前者を幸福感、後者をプライドで単的に表現して質問し、これらのものがはたしてどの程度に生徒の集団学習に影響するかを知ろうとした。

その結果、この調査に関する限り――したがつていゝかえればある一高校に関するかぎり――たしかに生徒たちのおちつかない傾向がみられたが、その原因はかなり現実的なものであることがあきらかになつた。

そして生徒たちの意識する愛校心的なプライドは、それがかなり一般的な幸福感、生活感情に対応するものではあるが、学習態度に一義的に関連するという仮説はこれを実証することができなかつた。

この時期の生徒はいわゆる青年期の不安な段階に生活するのであるが、学校において現実的に学習を妨げるような条件が取除かれるならば、そして適切に具体的な目標が与えられるならばかなりの程度おち

ついて学習するであろうと考えられる。そしてそのような安定から幸福感が生れ、生徒としてのプライドも高まつてゆくであろうと想像できる。しかしこれを逆にして、生徒にプライドをもたせればおちついて学習するようになり、それにつれて万事好転するだろうと考えてゆくことは――それは国の伝統を教え愛国心を養えば子供がおちついてよい子になつてゆくだろうという考え方と対応するかどうかは知らないが―少くともこの調査の結果からは不自然なものとみなされよう。

したがつて、もし教師がこのようなものを生徒の学習態度に一義的に結びつく手段として求めようとするならば、それは教師の自己満足に終る危険性があるといえよう。

しかしながら、いずれにせよ広い意味での雰囲気的なものはかなりの程度生徒の学習態度に作用することは否定できない。雰囲気的なものはすべての集団行動体に必然的に何らかの形で生じてくるものである。そうしたものゝ一例として生徒のかなり現実的な――観念的伝統的でない――学校意識というものが常に存在することはこの調査にも自づと示されたところであつた。

生徒の集団意識を高め、生徒―教師の精神的なつながりを深めるものとしての現実的な学校意識。もし校風というものをそのようなものとしても考えることができるならば、それが健全に伸びてゆくことを期待することは特に自我の発達する青年たちの学校において必要なことであろう。いうならば過去に目を向けた校風ではなく、明日に目を向けた校風とでもいうべきものを。

（一九五四・一・一六）

追　記

1、この調査ではサムプリングに不備な点があり女子のグループには進学志望者がわずかしか入らなかつた。したがつて集計の男女差は一般に女子には進学する者が少いという現実から生ずる男女差をある程度あらわしたものであつて、学習条件を同じくする男女の性的特質の差を意味するものとはならない。

2、プライドについて、それが生徒の伝統的意識からもたらされたものと、現実的欲求からもたらされたものとを充分に区別しなかつたのは重大な手落ちであつた。その点結論にやゝ飛躍を生じたきらいがある。

3、この調査結果はどこまでも質問紙法という限定された手段によつて、しかも非常に限られた質問による結果であつて、その点ふし穴から部屋をのぞいた感がないでもない。これは今後の研究の手がゝりに過ぎない。